

私にとって、今回で2回目となる「グローバル教育実践演習」による訪中事業は、昨年度同様、実りの多い体験となり、貴重な時間を過ごすことができた。中国の教育現場への訪問・交流から、日本の教育にこれから求められるであろうと印象に残ったことがある。そのことを端的に述べると「迅速果敢」という言葉で表現できる。三つの場面をもとに振り返る。

まず、新潟大学教職大学院生と北京師範大学珠海分校校区院生との課題研究発表会でのことである。

北京師範大学珠海分校校区の院生の発表は、昨年度の発表会での理論をもとにした実践報告であった。大学院卒業後、直ぐに現場の重要役職に就き、改革に取り組んでいることが伝わってきた。幼稚園におけるSTEAM教育のカリキュラム開発、中国の歴史や文化から中国人としての帰属意識を高める教育等の取り組みから、独自性の高い教育活動が見られた。現場で新しいことにすぐ取り組むのは簡単ではないが、実行できるだけの教職員の個人的能力の高さと、組織力の高さがうかがえた。

次に、惠州実験学校と京師南奥実験学校でのことである。

両校において、英語学習に驚きを隠せなかった。小学校1年生でオールイングリッシュの授業、中学生によるオールイングリッシュのプレゼンに、日頃の学習活動の充実を感じた。英語学習だけでなく、両校において自国文化を大切にする教育活動も見られた。他国を受け入れるとともに、自国を大切にする。不易流行を取り入れた教育活動が見られた。ここにも、それを実現させるだけの教職員の個人的能力の高さと、組織力の高さがうかがうことができた。



最後に、地域教育施設見学でのことである。

中国では近代的な都市のすぐ近くに、自然豊かな土地が存在したり、街中に発掘遺跡が展示されるなど歴史を感じることができる場所・建物が存在したりしていた。そこには多くの人々が集まり、活気のある様子が見られた。新しい文化を取り入れ、これまでの文化と融合しながら生活していく姿に、なぜ中国の教育が迅速果敢なのか、答えを見たような気がした。

2回目の中国訪問を経験し、日本の教育において今後ますます必要となってくるのは「交流」だと確信した。日本は島国のため、他国と比べて外国との交流が比較的少なかったことが想像できる。また、歴史を振り返ると国内での交流も制限されていた時代もあった。グローバル化が進む現在において、交流は必要不可欠なものになってきていると感じた。矛盾しているように見えるかもしれないが、これまでの文化・歴史を大切にするためにも、他地域との交流を深めていくことが重要なのだと確信した。

新潟大学教職大学院2年間の在籍で、2回の訪中は、私の人生において大きな財産となることは間違いない。その機会を与えていただいた教授の皆様をはじめ、受け入れていただいた中国の方々、支えてくれた家族、共に学び合った仲間感謝の意を表したい。